

令和 6 年 4 月 19 日現在

機関番号：32669

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00686

研究課題名(和文) 所有の概念・表現とその発達

研究課題名(英文) Possession in Language: Possessive Notions and Expressions in Adult Language and those in Child Language

研究代表者

松藤 薫子 (MATSUFUJI, Shigeko)

日本獣医生命科学大学・応用生命科学部・教授

研究者番号：90334557

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：所有を表す広範囲な意味の中で「人の身体部位の所有」に焦点を当てそれが表す形式の発達過程に関する実証的資料を検討し所有の言語化に関わる普遍的な原理について考察した。その結果、英語児は主語卓越型言語の特徴を、日本語児は主題卓越型言語の特徴を言語発達の早期に獲得することから、その特徴と複雑性の法則が影響して英語には外的所有構文があり二重主語構文がみられず、日本語には二重主語構文があり外的所有構文がみられないと議論した。生成文法理論の枠組みで言語獲得モデルを仮定し、言語獲得理論に主題卓越パラメータや複雑性を捉える法則があれば、身体部位表現の言語間変異と発達過程が説明可能であることを主張した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

1) 成人と子どもの言語知識に関する先行研究から得られた知見を統合させ、類型論的に異なる言語の実証的資料を精査し、所有の言語化の普遍性と多様性をもたらす普遍的な原理や多様性の要因の解明はより包括的な所有の言語理論構築につながる。

2) 研究成果で日本語児は日本語の文構造の基盤「主題+解釈」を早く獲得することを示した。その基盤が強固であるため、日本語を母語とする生徒が日本語の文構造の基盤と異なる英語を学ぶ場合、英文を解釈し理解する時に英語の文構造の基盤ではなく日本語の基盤に当てはめている可能性がある。言語の文構造の基盤が第一言語獲得にも第二言語学習にもどの程度影響を及ぼすかは今後の課題である。

研究成果の概要(英文)：This study focuses on the possession of one's own body parts with respect to the wide range of meanings of possession. It examines empirical data on the development of the forms and discusses the universal principles involved in the encoding of possession. I argue that English-speaking children acquire subject-prominent language features early in their language development, while Japanese-speaking children acquire topic-prominent language features at a corresponding point. I consider that English has external possessive constructions and no double-subject constructions, while Japanese has double-subject constructions and no external possessive constructions, due to these features and the law of complexity. I argue that if language acquisition theory assumes within the framework of generative grammar that it has laws that capture the topic-prominent parameter and the notion of complexity, it can explain the cross-linguistic variation and development of body part expressions.

研究分野：言語心理学 第一言語獲得研究

キーワード：所有の言語化 所有の概念化 子どもの言語発達

1. 研究開始当初の背景

本研究における理論的枠組みは、生成文法理論に基づく生得的アプローチである。言語は、子どもの発達過程で、言語入力と言語獲得装置(言語獲得原理と生得的に備っている普遍文法を含む装置)が相互作用して獲得されるという言語獲得モデルが仮定されている(Chomsky 1965, 1975, 1986, 1995, 2001, 2005 など)。1980年代は豊かな普遍文法が想定され、原理と、言語間変異を導くパラメータが検証された。最近では極小化された普遍文法が展開され、ミニマリスト・プログラムでは、言語の成長と発達に、1) 遺伝的要因(普遍文法)、2) 環境要因(言語入力)、3) 言語に固有でない自然法則や認知的制約(第三要因)という3つの要因が関与すると想定されている(Chomsky 2005)。同理論の枠組での母語獲得モデル Yang (2002)、Legate and Yang (2007)は生得性と、環境(言語入力と統計的学習)の両方を重視している。同理論の精神に従っているが、普遍文法をChomskyのように静的な、成人の文法だけで規定するより、動的過程として規定するほうが妥当であるとする動的な文法理論がある。梶田(1977, 1997)により展開されているこの理論では、普遍文法は獲得過程の中間段階の文法の特徴に基づいて規定され、言語間変異は、獲得過程のある段階から次の段階へ移行する過程をとらえる一般法則の帰結として得られると主張されている。

生成文法理論に基づく所有表現の獲得研究の多くは連体的所有表現を対象とし、John's carのような限定詞句やJohn's brother's carのような再帰的所有に見られる、統語論の分野の機能範疇や回帰性を検証するものであった(Marinis 2016 他多数)。連体的所有表現だけでなく叙述的所有表現を含めた獲得研究は Eisenbeiß et al. (2009) だけである。松藤(2014, 2015, 2016, 2017, 2018, 2019)は6年間、主に英語と日本語の叙述的所有表現(所有文)の統語的・意味的・語用論的特徴とその獲得研究、獲得過程における所有文と連体的所有表現の関連性を研究してきた。

母語獲得研究を含め言語研究で検討されるべき重要な研究課題の1つは、普遍文法の内部構成のあり方である。人間の言語の可能な文法の類(普遍文法)が成人の文法だけで規定できるのか、獲得過程の中間段階の文法に基づいて規定するほうが妥当であるのか、という問題である。成人の言語知識を捉える文法理論で提案されているパラメータの妥当性が言語獲得研究で実証されたものがある(Hyams 1986, Murasugi 1991, Sugisaki 2005, Sano 2018 など)。一方、松藤(2000, 2003, 2006)の研究には、パラメータでは説明できず、動的な文法理論により説明されることを明らかにしたものがある(松藤)。英語児は(数量表現が名詞句の内部に生起し限定詞的に機能する)Determiner-Quantificational Expression(D-QE)を(文中に生起し副詞的に機能する)Adverbial-QEより早く使い始めるが、日本語児はA-QEをD-QEより早く使い始めるという知見が(i)英語と日本語の成人の文法におけるD-QEとA-QEの使用頻度の相違と(ii)言語獲得過程における名詞と動詞の獲得順序に相関していることを示した。この事実は獲得段階の比較的早い段階の文法がどのようなものであるかによって次の段階の文法が異なるという一般法則により説明され、動的な文法理論の妥当性を示した。所有文の獲得研究においては、松藤(2017)は、存在文「NP1 {に/には} NP2がある」、非典型的な所有文「NP1は NP2がある」、非典型的・典型的な所有文「NP1 {は/には} NP2がある」がこの順番で発話されることを示し、この獲得過程には、習得過程のある段階の文法の特長に基づいて、次の段階の文法で所有文が可能となるような普遍文法の動的な内部構成が関与していることを主張した。

検討されるべきもう1つの研究課題は、どのような言語獲得原理がどのように働いているのかを解明することである。例えば、基数的数量表現は比率的数量表現よりも早く獲得される事実(松藤 2000, 松藤 2006, Matsufuji 2008)や日本語児より英語児のほうが物の個別性に対応した数量表現を早く獲得するという事実(松藤 2009)を指摘し、「単純であるほど、獲得が早い」という普遍的な獲得原理が機能していることを示した。松藤(2017)は、所有文と存在文の獲得過程を比較し、「NP1 {に/には} NP2がある(存在)」から「NP1は NP2がある(非典型的な所有関係)」への獲得順序を考察し、この背後には「子どもは形と意味の結びつきにおいて、1対1の結びつきを好む」(Slobin 1985, Clark 1987)のような言語獲得原理が機能していることを示した。

2. 研究の目的

本研究では、これまでの様々な研究から得られた知見を統合して、所有の言語理論構築を目指すことを目的とする。具体的には、所有の概念がヒトの言語という仕組みにおいて、どのように実現されるのかを解明したい。このような理論的実証的研究は、言語理論と言語獲得理論の精緻化を目指す点において重要な研究である。

3. 研究の方法

本研究では、これまで様々な研究から得られた知見を統合して、所有の言語理論構築を目指す。

具体的には所有に関わる諸概念を概観し、所有の概念がどのように言語化されているのかを、言語理論、類型論、意味論、語用論の視点から検討する。所有の概念化と言語化がどのように発達するかを考察する。研究の方法は、以下(1)~(4)の順で進める。

(1)「所有」という概念をどのように捉えたらよいのかについて概観し考察する。所有の概念の哲学的意義を理解し、所有に関わる諸概念を所有の言語化という視点から概観する。所有の概念の捉え方として、独立した、原始的・決定的な特徴の集合と経験に動機づけられた、より基本的な、同時に起こりやすい特徴の集合で、特徴間に家族的類似性を示す集合などがある。Taylor(1996:340)はこれを採用し、The possession gestaltを提案している。その提案の基となる現象や考え方をLocke(1689), Snare(1972), Miller and Johnson-Laird(1976), Lakoff and Johnson(1980)から考察を始めLyons(1977), Barker(1995), Langacker(1995), Tsunoda(1995), Heine(1997,2001), 大庭・鷲田編(2000,2007), 加藤(2001,2008), Stassen(2009), McGregor ed.(2009), Ross and Friedman eds.(2011), Aikhenvald and Dixon eds.(2013), Johanson, Mazzitelli, and Nevskaya(2019)などを参考に整理する。

(2)所有の概念がヒトに固有の言語においてどのように実現されているかについて考察し、言語理論、類型論、意味論、語用論の視点から検討し、その理論構築を行う。具体的には、言語獲得の最終産物である成人の言語の仕組みにおいて、所有がどのように言語化されているのかを明らかにするために、先行研究では、所有の言語化についてどのような記述や説明がなされているのか、世界の諸言語では、所有の言語化においてどのような普遍性と多様性がみられるのかを考察する。

(3)(2)で明らかになる仕組みがどのように獲得されるのかを明らかにする。具体的には、類型論的に異なる言語(英語、日本語、中国語など)について、所有の言語化の発達過程に関する実証的資料を精査する(成人の言語アンケート調査資料、子どものCHILDESなどの発話資料、子どもの実験的手法による調査資料を分析考察する)。

(4)世界の諸言語でみられる所有の言語化についての普遍性と多様性を捉える普遍的な原理について考察する。所有表現の獲得過程で言語間変異が生じる要因について考察を行う。さらに、所有の概念化と言語化に関する成人の知識の解明と子どもの所有表現の獲得過程の解明を踏まえたうえで、普遍文法と言語獲得原理がどのようなものでなければならないかを検討する。

4. 研究成果

(1)言語研究をする場合、所有の概念をどのように記述するのが妥当であるかを先行研究に基づき考察した。その結果、所有の概念の捉え方を4パターンに分類した。所有の概念は、部分全体関係で捉えるか、または中心的段階性で捉えるか、中心的段階性の場合、中心はいくつの要素で構成され、いくつの段階があるのかにより特徴づけられることを示した。今後の課題は、所有の概念は、部分全体関係で捉えることが妥当なのか、典型とその変異で捉え、その変異がどのようなものを理論的実証的に探究・検証することである。

(2)所有の意味タイプは10種類あると考えられる。日本語には、所有表現として名詞的所有と叙述的所有があり、それぞれ10種類の意味タイプを表すことが可能である。これ以外の所有表現を周遍的な所有表現と呼ぶことにする。その表現は、意味的な所有者と所有物な関係を、所有者は動詞の中心的な文法関係で、所有物は所有者とは違う構成素で表す構文である。そのような構文として、日本語では、他動詞文、所有受動構文、二重主語構文がある。本論文では、この3つの構文の統語的特徴と意味的特徴を考察した。その結果、所有者を表す名詞句が文内にある他動詞文は3つの意味タイプ、所有者名詞句が単文を超えた文頭にある所有受動構文は7タイプ、所有者名詞句が単文を超えた文頭にある二重主語構文は10タイプを表すことが可能であること、表す意味範囲の違いは所有者の生起位置、動詞の種類と意味が関係することが分かった。

(3)日本語、英語、中国語に焦点を当て、所有の多様な意味において、どのような意味をどのような表現で表すのかを考察した。所有の意味に関しては、所有の典型的諸特徴に基づき、典型性に段階性があり、10タイプあると仮定する。3か国語において、名詞的所有と叙述的所有という形式で10タイプを表すことができる。名詞的所有の形式に関しては、日本語はNP1のNP2、中国語は標識deがある名詞句とない名詞句、英語はNP1's NP2, NP2 of NP1がある。叙述的所有は3か国語とも所有動詞が使われる。

名詞的所有と叙述的所有以外の表現に関して、中国語は、二重主語構文、他動詞文、自動詞文、話題文では10タイプを表す。英語は外的所有文があり、使える動詞と表す意味に制限がある。日本語では、外的所有文はないが、所有者名詞句が単文を超えた文頭にある所有受動構文は7タイプ、二重主語構文(感情形容詞文)は4タイプ、所有者を表す名詞句が文内にある他動詞文は3タイプを表す。表す意味範囲の違いは、所有者の生起位置、動詞/形容詞の種類と意味が関係する。上記の3つの形式で共通して表す意味タイプは身体部位の所有、社会的譲渡不可能な事

の所有，社会的譲渡可能な事物の所有である。

(4) 様々な所有の形式を使用して、所有を表す複数の意味タイプのうち、どの意味タイプが一番表されているのかを日本語・英語・中国語で考察した結果、それは身体部位の所有の意味であり、所有の意味の中で中心的な意味タイプであるとみなした。身体部位を表す表現を子どもがどのように獲得するのかを考察し、身体部位の所有を表す形式の多様性のメカニズムを検討した。所有を表す広範囲な意味の中で「人の身体部位の所有」に焦点を当て、それが表す形式の発達過程に関する実証的資料を検討した結果、英語児は主語卓越型言語の特徴を、日本語児は主題卓越型言語の特徴を言語発達の早期に獲得することから、その特徴と複雑性の法則が影響して、英語には外的所有構文があり二重主語構文がみられず、日本語には二重主語構文があり外的所有構文がみられないという結果が生じると議論した。生成文法理論の枠組みで言語獲得モデルを仮定し、言語獲得理論に、主題卓越パラメータ (Baker 2001:182-184) や複雑性 (概念と形式の対応関係, 概念/統語構造の基本と派生の関係) を捉える法則があれば、身体部位表現の言語間変異と発達過程が説明可能であることを主張した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 松藤 薫子	4. 巻 1
2. 論文標題 言語研究における所有の概念に関する一考察	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本獣医生命科学大学 教職教育研究	6. 最初と最後の頁 2-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 松藤 薫子	4. 巻 1
2. 論文標題 日本語の周辺のな所有表現に関する一考察	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本獣医生命科学大学 教職教育研究	6. 最初と最後の頁 16-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 松藤 薫子	4. 巻 1
2. 論文標題 日本語、英語、中国語の所有の言語化について	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本獣医生命科学大学 教職教育研究	6. 最初と最後の頁 31-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 松藤 薫子
2. 発表標題 身体部位の所有表現の形式の多様性とその表現の発達
3. 学会等名 日本言語学会第167回 大会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------